

岡山市・福山市における“濃い”方言の使用に関する 社会言語学的研究

—「じゃが」「けん／けー」「ぼっけー／でーれー」—

尾崎 喜光[※]

A Sociolinguistic Study of the Use of “Deep” Dialect in Okayama City and Fukuyama City:
-jaga, -ken/-kee, Bokkee/Deeree

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

全国共通語（標準語）と異なる特定地域でのみ用いられている表現、すなわち方言形式（以下では簡単に「方言」）の中には、たとえば岡山県などで使われている「（ページを）めくる」という意味での「はぐる」のように、地域独特の表現というニュアンスが希薄なものもあれば、他所の人が聞くと地域性が強く感じられ、地元の人もこれぞ我が方言と自認する色の濃い方言もある。実際にはその中間もあるし、特定の表現に対する方言の濃さに関する位置づけも人により異なるであろうが、こうした違いが意識されているということ自体は確かなことであろう。

このうち後者の“濃い”方言（俗に言う“きつい”方言）は、他所の地域との差別化およびその地域の独自性を演出するための指標として、他所からの旅行者や他所の土地に出かける人に土産物として購入してもらうことを想定した菓子のパッケージ等に用いられることもある。たとえば、（有）菓子処ひらい（倉敷市）が製造している焦がし饅頭「こげまん」の包装には、「やっちもねー（＝しょうもない）」「ちばける（＝ふざける）」「でえれえ（＝とても）」など、この種の岡山弁がちりばめられるように掲載されている（カッコ内は包装紙に書かれている共通語訳）。また、（株）廣榮堂（岡山市）が最近製造を始めた「岡山弁きびだんご」には、包装紙のみならず個々のだんご本体にも、「おえん（＝ダメ）」「せられー（＝しなさい）」「でーれー（＝ものすごい、ものすごく）」「じゃろ？（＝～だろう）」等が着色料で印字されている。岡山県で生まれ育った人であれば、岡山弁の“代表選手”と自認し、他所の人もそう感じそうな“濃い”方言である。

こうした“濃い”方言の中には、確かにそうした表現はあるけれども、その表現が“濃い”ゆえに、共通語の普及により共通語形に取って代わられ、現在では使用者率や使用頻

キーワード：“濃い”方言，言語変化，無作為抽出多人数調査，広島県の「～じゃん」

Keywords: “deep” dialect, language change, random sampling survey of large number, -jan in Hiroshima prefecture

※ 本学文学部日本語日本文学科

度が低いものも少なからずありそうである。

そこで本稿では、こうした“濃い”方言に注目し、多人数を対象に最近調査を実施した岡山市と福山市（広島県）において、現在の使用者率がどのようなものであるのかを分析する。

分析対象とする表現は、共通語で言うと、①「～じゃないか」、②理由を表す接続助詞「から」、③程度がはなはだしいことを表す程度副詞「すごく」である。岡山市や福山市ではそれぞれ、①「～じゃが」、②「けん」「けー」、③「ぼっけー」等となる。

なお、当地における“濃い”方言の中にはこれら以外に、さまざまな品詞に接続する推量形の「～じゃろ？」（＝「～だろ？」「～でしょ？」）、形容詞推量形の「～かる？」（「寒かる？」等）、間投助詞「な」などもあるが、これらについては女性的表現／男性的表現という観点から、先行して調査を実施した岡山市について尾崎喜光（2017）で分析している。また、語形面での方言の“濃さ”の要因の一つとなっている連母音の融合については、尾崎喜光（2014）で岡山市の場合を分析している。さらに、“濃い”方言という面もないではないが、むしろ“ふつうの”方言という位置づけで、岡山市と福山市における動詞の打消し表現、打消し過去の表現、アスペクト表現については尾崎喜光（2020）で分析している。本稿では、過去に行ったこうした分析・報告を受け、上記3項目について分析する。

2. 調査概要

本稿で議論の根拠とするデータは次の調査により得たものである。いずれも筆者がたずさわった調査である（福山市の調査は灰谷謙二氏〔尾道市立大学・教授〕との共同研究）。なお、実査は調査会社に委託して実施した。^{注1}

(1)岡山市：人口比に応じた確率で無作為に選ばれた岡山市8地点の中から、性別・年齢層について母集団の構成比を反映するよう層化して無作為に選ばれた20歳～79歳の男女81人が回答。調査方法は個別面接法。実査は2013年10月～11月に実施。調査員は5名。

(2)福山市：岡山市での調査と同様の方法で選ばれた福山市8地点の中から、やはり岡山市での調査と同様の方法で選ばれた20歳～79歳の男女80人が回答。実査は2018年10月～11月（女性40人）、2019年5月～6月（男性40人）の2年に分けて実施。調査員は6名。（6名とも岡山市調査とは別の調査員）

なお、母集団と調査サンプルを属性別比較から見たとき、母集団に対する調査サンプルの代表性はおおむね確保できていることの確認等を含む調査の詳細は、岡山市については尾崎喜光（2014）で、福山市については尾崎喜光（2020）で述べている。

その中で、回答者およびそこから推測される母集団の地理的背景については、岡山市と福山市とで多少違いが見られることを指摘した。両市を比較する上で重要な情報となりうることから再度簡潔に述べておく。

両市のサンプルとも、県レベルでは地元出身者が8割前後と多くを占める点はほぼ同じである。しかしながら市町村レベルでは多少異なりが見られる。福山市では福山市出身者が多くの割合を占めるのに対し、岡山市では県内他市町村出身者の方が岡山市出身者よりもむしろ多い。15歳までの最長居住地との関係から考えると、岡山市では小さいうちに県内他市町村から岡山市に転入した者が少なからずいる。

3. 調査結果

3.1. 「～じゃが」

共通語の「～じゃないか」(あるいは「～じゃん」)に当たる文末の表現を岡山市では「～じゃが」と言う。地元の人はこれを代表的な岡山方言として示すことが少なくない。

調査では次の質問文と選択肢により、この種の表現の使用に関する回答を求めた。回答者の手元に置いてもらった「回答票」には、このうちの選択肢のみが書かれている。

(1)〔回答票 39〕あしたは雨なのに、「あしたテニスしない？」という電話が友達からかかってきたとします。次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。テニスをしない方も、テニスをすると考えて答えてください。(M. A.)

- (ア) (あしたは) 雨じゃが
- (イ) (あしたは) 雨じゃがな
- (ウ) (あしたは) 雨やが
- (エ) (あしたは) 雨やがな
- (オ) (あしたは) 雨じゃん
- (カ) (あしたは) 雨やん
- (キ) (あしたは) 雨じゃないか
- (ク) (あしたは) 雨じゃない
- どれも言わない

友達に対し「(あしたは) 雨じゃないか」と指摘する場面を回答者に想定させ、これに相当する共通語形・方言形を自分で言うことがあるか否か回答させた。「雨じゃが」の使用が最も注目されるが、それと置き換え可能で当地でも使われていそうな他の表現の使用についても合わせて確認した。

関西のすぐ西側にある当地では、関西方言の伸張も考えられることから、断定の助動詞「じゃ」を「や」に置き換えた「雨やが」およびそれに終助詞「な」を付加した「雨やがな」も選択肢とした。これとの並行関係で、「雨じゃが」に「な」を付加した「雨じゃがな」も選択肢とした。対応する共通語形は「雨じゃないか」であるが、終助詞「か」を脱落させた「雨じゃない」も選択肢とした。そのくずれた形と考えられる「雨じゃん」も低文体の共通語として各地で用いられていることから選択肢とした。さらに、その関西形の「雨やん」も選択肢とした。

複数の表現を用いる回答者がいることが十分想定されることから、自分で言うことのある表現を全て選択させた(「M. A.」は「複数回答可」の意味)。なお、「どれも言わない」は回答票にはなく、調査票にのみある。回答者がどれも選択しなかった場合、調査票にはどこにもチェックが付かないことになるが、そのままだと調査漏れである疑いが出てくるため、調査漏れではなくどれも選択しなかったということを積極的にマークするために、調査票にだけは「どれも言わない」が追加されている。

結果は図 1-1 (岡山市)・図 1-2 (福山市) のとおりであった。

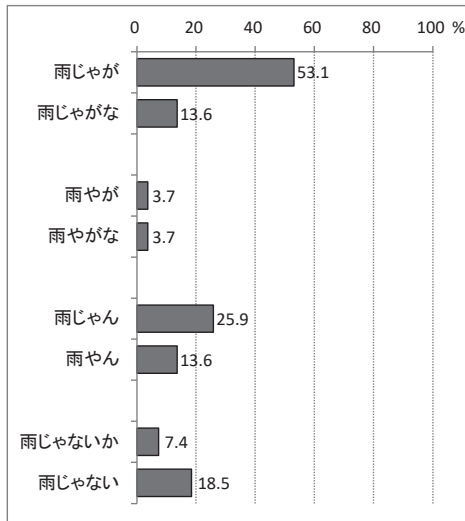


図 1-1 <～ではないか> (岡山市)

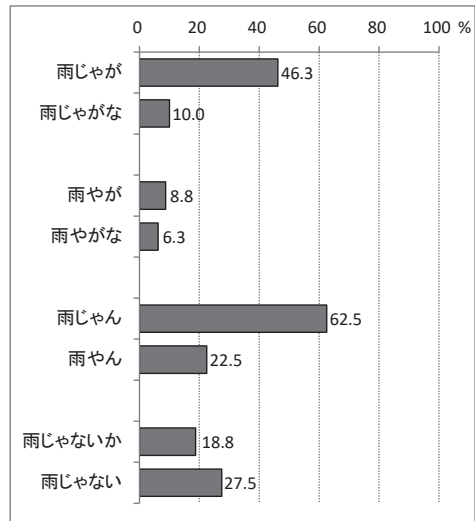


図 1-2 <～ではないか> (福山市)

最も注目した「雨じゃが」の使用率、岡山市も福山市もおおよそ5割である。代表的な方言と言われながら、使用率という点では必ずしも代表的であるわけではなく、使わない人も半数いる。これに終助詞「な」を付加した「雨じゃがな」は使用率がさらに低くおおよそ1割にとどまる。言うとなれば「雨じゃがな」よりも「雨じゃが」である。

これらの関西形である「雨やが」「雨やがな」の使用率は極めて低く、岡山市でも福山市でも基本的に使われていないと言ってよい状況である。この表現における断定の助動詞「や」は、当該地域にはあまり及んでいない。

共通語形の「雨じゃん」は、岡山市では使用率が2～3割にとどまり有力形というほどではないのに対し、福山市では6割にのぼる。この数値は「雨じゃが」を上回り、福山市においては最もよく使われる表現となっている。これを、共通語の「じゃん」が福山市においてはかなり普及していると見ることもできるが、別の可能性として、約5割の市民が用いている「じゃが」の「が」が撥音便化して「じゃん」となったものとも考えられる。ただし、中国地方では非語頭のガ行鼻音は昔も今もほとんど使われていないことからすると(尾崎喜光 2015)、「じゃが」の「が」は[ŋa]ではなく[ga]であり、撥音便に含まれる鼻音性が何に由来するのかの説明が必要となる。

福山市の「じゃん」には別の可能性も考えられる。JR西日本では、中国地方の新幹線停車駅から広島駅までの期間限定新幹線等割引切符を企画しているが、そのチラシには「ぶちエエじゃん GO! GO! 広島きっぷ」と大きく表示されている。本稿の後に見る広島方言の程度副詞「ぶち」が使われていることも注目されるが、ここで最も注目したいのは「エエじゃん」の「じゃん」である。「ぶち」が方言形であり、「ええ」も九州を除く西日本等に分布する方言形であることを考えると、このコピーは地域性を色濃く出すことで鉄道利用者に親しみやすさを演出しているものと考えられる。そのことを考えると、「エエ」に続く「じゃん」は首都圏等で使われている「じゃん」ではなく、広島方言としての「じゃん」である可能性が高いように思われる。

こうした「じゃん」について、筆者が勤務する大学の教職員で、福山市ないしはその近

辺に在住して「じゃん」を使うことのある者数名に確認したところ、東京などの「じゃん」を使っているという意識はなく、もともとある言葉を使っているという意識のようであった。この点からも、「じゃん」は広島県における方言としての表現であると考えられる。ただし、広島方言に関する代表的な解説書である『日本のことばシリーズ 34 広島県のことば』(1998 年刊行)において、かなり網羅的に示された「方言基礎語彙」の見出しに「ジャン」が掲げられていないことからすると、これはそれほど古くない時期に生じた表現である可能性が考えられる。

この「じゃん」の元の形は、「じゃないか」の「か」が脱落した「じゃない」ではないかと推測される。「じゃない」が広島県でも用いられていることについては、国立国語研究所編(2003)所収の、広島市で1977年に収録された談話資料(会話資料)に「アッタジャン。マツリガ。(あったではない[か]。祭りが。)」(p.108)があることから確認できる。「じゃん」はこの「じゃない」が変化して得られた語形ではないかと推測される。上記『日本のことばシリーズ 34 広島県のことば』の「方言基礎語彙」にも、「ジャーナカ」(例文「ハー ソレデ エージャナカ」[もう、それでいいじゃないか])は見出しとして掲げられている。「じゃん」の撥音「ん」の鼻音性は「ない」の「な」に由来するものという音声学的な説明もできる。じつはこの変化の道筋は、首都圏等の「じゃん」と同様と考えられる。同様の変化が離れた地域で別々に生じ、広島県では地元の方言形ないしはもともと使っている言葉と意識されているものと考えられる。

この「雨じゃん」の関西形である「雨やん」は2割前後の使用者率が見られる。先に見た「雨やが」は、関西の表現の取り入れというよりも当該地域の「雨じゃが」の「じゃ」を単に「や」に置き換えたものと考えて回答したならば、それは岡山であり得ない表現だと意識された結果数値が低くなったのかもしれない。それに対し「雨やん」にはそのような事情がないことが、相対的に使用者率が高い要因となっている可能性が考えられる。

共通語形の「雨じゃないか」「雨じゃない」は、使用者率が極端に低いというほどではないが1～3割にとどまり、当該地域においては有力な表現とはなっていない。

図1-3は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。

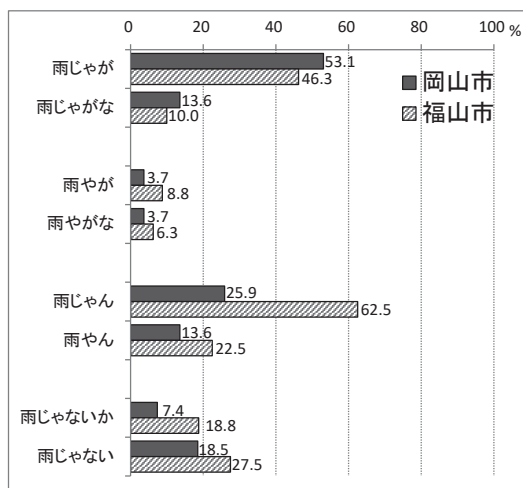


図1-3 <～ではないか> (岡山市と福山市の比較)

両市で数値が大きく異なるのは「雨じゃん」である。数値が一定程度見られる中での2倍ほどの差である。福山市で使用者率が高いという形での岡山市との地域差が改めて確認される。福山市の周辺ではどのような状況であるのか、また福山市と岡山市との間では数値がグラデーション的に移行するのか等、今後の解明が望まれる表現である。

図1-4-a～図1-5-bは、岡山市・福山市の結果を属性別（男女別・年齢層別）に分析したものである。回答者の総数が岡山市81人、福山市80人にとどまるため、属性別分析は精度が限定的であり、読み取りには注意を要する。ここでは数値の大きな違いの有無という点から結果を見ていく。

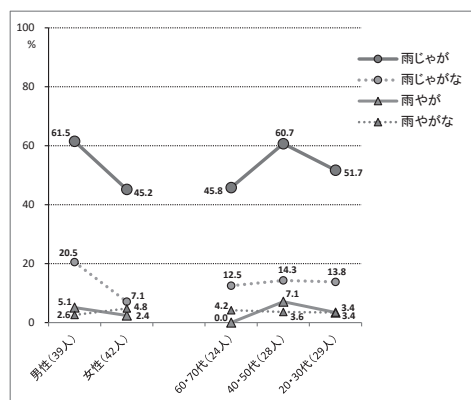


図1-4-a <～ではないか> (岡山市)

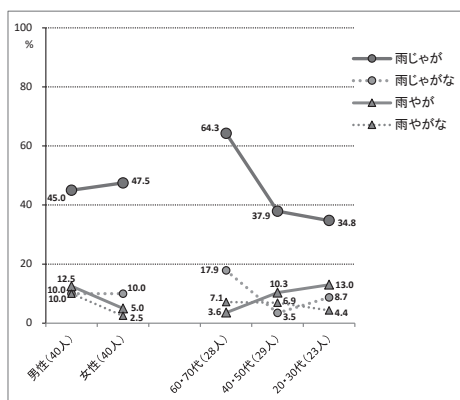


図1-5-a <～ではないか> (福山市)

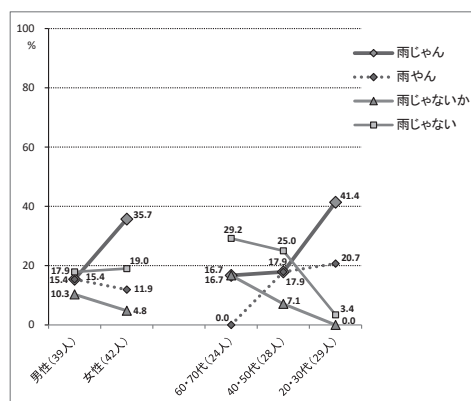


図1-4-b <～ではないか> (岡山市)

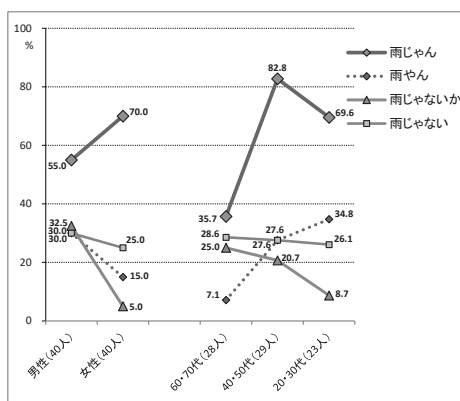


図1-5-b <～ではないか> (福山市)

男女別に見ると、両市に共通して認められる比較的大きな男女差を伴う表現は「雨じゃん」である。使用者率は男性よりも女性においてそれぞれ2割ほど高く、どちらかと言えば女性がよく使う表現となっている。最も注目した「雨じゃが」は、岡山市では男性の数値が女性よりも2割ほど高いのに対し、福山市ではそのような男女差は特に認められない。

年齢層別に見ると、特に福山市において「雨じゃん」に大きな違いが認められる。60・70代ですでに4割近くとある程度数値が高くなっているが、40・50代では数値が8割程度にまで倍増し、その下の年齢層も高い数値を保っている。もし共通語としての「じゃん」の普及であるならば、若者語のように低文体で使用されるであろうことを考えると、20・

30代での使用者率が高くても40・50代では低くなることが見込まれる。しかし実際にはそうっていないことを考えると、先に述べたように、地元において「雨じゃない(か)」から変化した「雨じゃん」である可能性がおおいに考えられる。岡山市も、60・70代と40・50代では約2割と数値が低いものの、20・30代では約4割と倍増し、似たような動きを示す。福山市ないしはその周辺で変化が生じているのだとするならば、岡山市でもそれが次第に生じているということも考えられそうである。

3.2. 「～けん／けー」(理由を表す接続助詞)

理由や原因を表す接続助詞「けに」の「に」を撥音便化したものが「けん」、さらにその「ん」を脱落させて直前の母音「え」を引き延ばしたものが「けー」である。

国立国語研究所が全国約800地点の生え抜き高年層男性を対象に1980年前後に臨地面接法により調査した結果をまとめた『方言文法全国地図』(全6集；以下GAJ)のうち、第33図「(雨が)降っている[から]」(第1集所収)によると、中国・四国・九州(北半分)では「ケー」ないしは「ケン」が広く用いられていることが確認される。岡山県・広島県に注目すると、「ケン」よりも「ケー」の方が全域で優勢であり、「ケン」は岡山県北部や瀬戸内海島嶼部等に見られるのみである。なお、岡山県では、隣接する兵庫県等において併用の形で用いられている共通語形「カラ」も、「ケー」との併用の形で用いられている。

GAJの約30年後となる2010年から2015年にかけて全国554地点の70歳以上の生え抜きを対象に調査した国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(以下FPJD)の主要項目を言語地図としてまとめた大西拓一郎編(2016)の「降っているから」(解説=大西拓一郎氏)によると、「ケー」類の分布はGAJと比べ大きな変動は見られないとする。「ケー」(「ケン」)は西日本において安定的に用い続けられている。では、両市での多人数調査の結果はどのような傾向を示すであろうか。

質問文と選択肢は次のとおりである。接続助詞の直前は動詞「降る」とした。

- (2)〔回答票38〕「あしたは雨が降るから傘を持って行け」と言うときの「降るから」を、家族に対してふだん何と言っていますか？ 自分で言うことがあるものをすべて選んでください。(M. A.)
- (ア) 降るけん
(イ) 降るけー
(ウ) 降るから
どれも言わない

結果は図2-1(岡山市)・図2-2(福山市)のとおりであった。

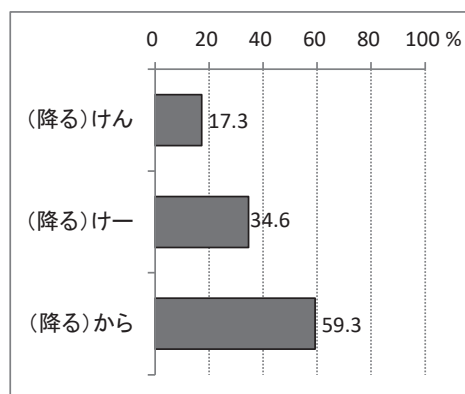


図 2-1 理由を表す接続助詞 (岡山市)

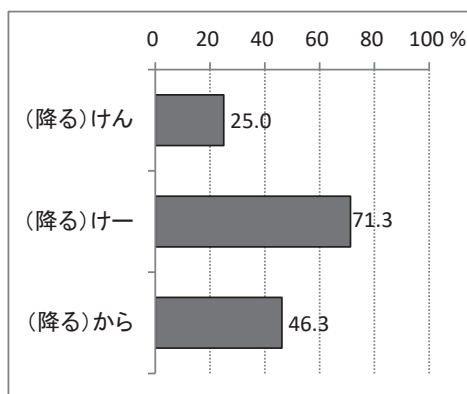


図 2-2 理由を表す接続助詞 (福山市)

最も優勢な表現は両市で異なる。岡山市は「から」であるのに対し、福山市は「けー」である。GAJによると、岡山県では「ケー」と「カラ」が併用の形で見られる地点が少なくないのに対し、広島県では「ケー」が非常に優勢である。かつてのそうした地理的異なりが、現在でも数値的異なりとして表れているものと考えられる。岡山県では共通語形「カラ」がGAJの後にさらに強まった可能性も考えられる。なお、福山市でも「から」は5割近い人が用いていることからすると、「けー」が優勢な福山市でも、「から」が徐々に広まりつつあるものと考えられる。使用者率という点から見ると、岡山市での「けー」「けん」は必ずしも代表的な方言というわけではない。

「けー」と「けん」との関係を見ると、両市とも「けー」の方が優勢である。GAJおよびFPJDに見られる両表現の地理的分布の優劣が、現在の両市における使用者率の優劣としても現れている。

図 2-3 は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。

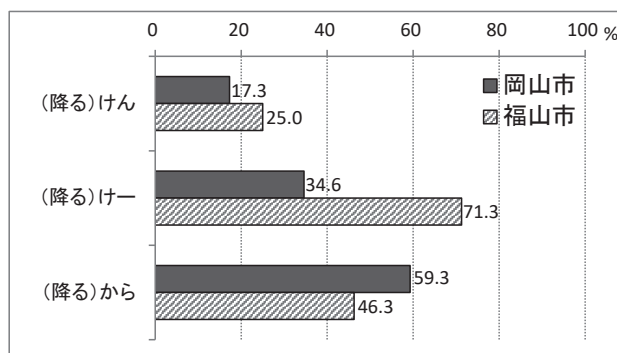


図 2-3 理由を表す接続助詞 (岡山市と福山市の比較)

「から」は福山市よりも岡山市で優勢であること、逆に「けー」は岡山市よりも福山市で優勢であることがわかる。福山市での「けー」の使用率の高さは、地理的に見ると、「けー」の分布域の中心部に岡山市よりも近いことが関係しているものと考えられる。

図 2-4・図 2-5 は属性別（男女別・年齢層別）に分析したものである。

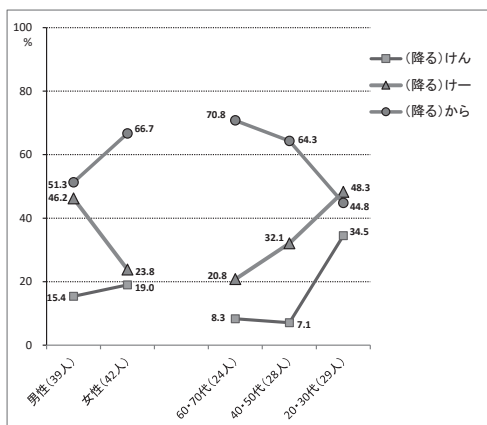


図 2-4 理由を表す接続助詞 (岡山市)

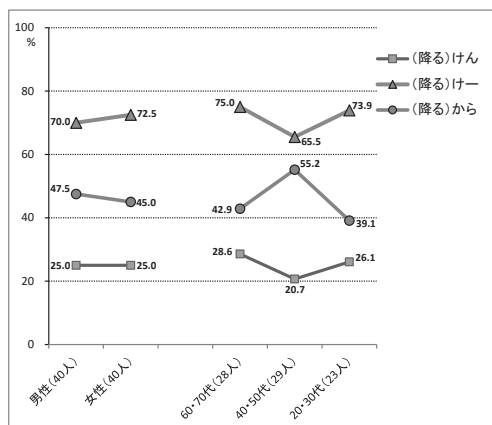


図 2-5 理由を表す接続助詞 (福岡市)

男女別に見ると、福岡市では男女差がほとんど見られないのに対し、岡山市では「けー」が女性よりも男性で使用者率が高い一方、「から」は逆に女性の使用者率が高いという違いが認められる。

年齢層別に見ると、福岡市では年齢層による違いがほとんど認められず、いずれの表現も安定している。これに対し岡山市は、「けん」と「けー」は若年層になるに従い使用者率が高くなるのに対し、「から」は逆に若年層になるに従い使用者率が低下するという違いが認められる。

このことに関連し、1997年に30代から80代までの広島方言話者男女10名を対象に、7つの会話場面を想定させ自然談話に近いロールプレイをしてもらった文字化資料（談話資料）について、理由を表わす接続助詞の方言形「ケー／ケン」（ただし文末での用法も含む）と共通語形「カラ」の使用状況を分析した町博光（2019）は、「ケー／ケン」は30代の女性を中心に活発に使用されていること、老年層は「カラ」を、若年層は「ケン／ケー」を使用する傾向があることを報告している。本調査から約20年前の調査ではあるが、岡山市と同じ傾向が広島方言話者にも認められる点は注目される。日本各地で一般に認められる共通語化とは逆の方向への変化が、中国地方の一部で確かに認められるとしたらそれはなぜなのかなど、今後の精査が望まれる。

3.3. 「ぼっけー」「でーれー」（程度副詞）

程度がはなはだしいさまを表す程度副詞の全国的バリエーションはじつに多彩である。たとえば北海道では「なまら」（「なまら美味しい！」など）やここから変化した「なんま」などが用いられている。

岡山市では、「ぼっけー」の連母音が融合して生じた「ぼっけー」や、「どえらい」の連母音がやはり融合して生じた「でーれー」が方言形としてよく知られている。

両市における現在の使用者率について、共通語形の「すごく」や、現在ではかなりの程度全国区化している関西由来の「めっちゃ」ないしはそのバリエーション等も含め、多様な選択肢を示して回答を求めた。

質問文と選択肢は次のとおりである。程度副詞を受ける述語は「疲れた」とした。

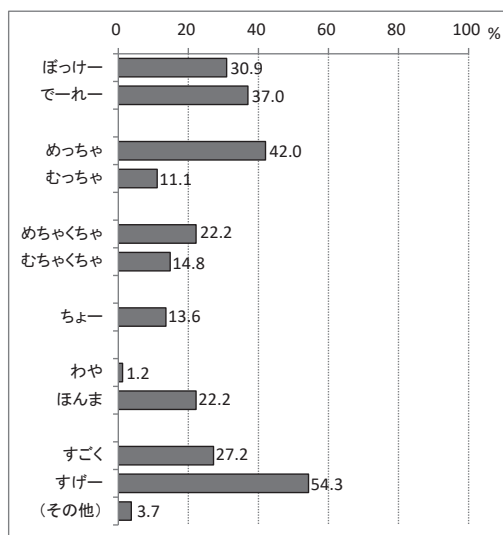


図 3-1 程度副詞（岡山市）

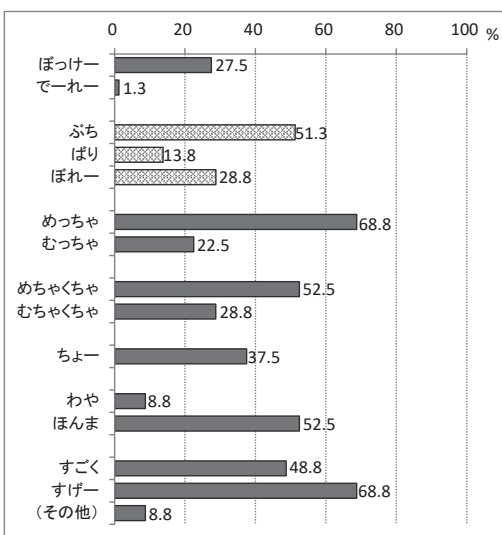


図 3-2 程度副詞（福山市）

最も注目した「ぼっけー」「でーれー」をまず見てみよう。

「ぼっけー」の使用者率は両市とも3割程度にとどまり、使用者率という点から見ると、現在では代表的な方言とは言い難い状況である。

「でーれー」も岡山市では4割程度にとどまり、使用者率という点ではやはり代表的とまでは言い難い。なお、福山市で「でーれー」を使う人はほとんど見られず、両市における地域差が明確に認められる。「ぼっけー」は両市で共通に用いられる、ある程度広範な使用域を持つ方言であるのに対し、「でーれー」は岡山市あるいはその周辺を含む比較的狭い地域でのみ用いられる方言ということになる。

福山市でのみ追加した3つの方言的表現の使用者率は、「ぶち」が約5割、「ばり」が1割強、「ぼれー」が約3割である。JR西日本のチラシのコピーとしても用いられ約半数が用いている「ぶち」が最も有力な方言形であり、次いで「ぼれー」である。灰谷謙二監修(2016)にはこのうちの「ぶち」が広島方言として紹介されているが、もともとは北九州や下関方面で使われていたものとされている。ここからすると、「ぶち」は広島県内を東進し、県内東部の福山市にも有力な方言形として及ぶようになったものと考えられる。

こうした方言形以上に優勢なのは、関西起源の「めっちゃ」と、共通語「すごい」の崩れた形である「すげー」である。

「すげー」は両市において最もよく使われる表現となっており、ともに半数以上が用いている。その元となった「すごい」のさらに元となった「すごく」の使用者率も低くなく、岡山市で約3割、福山市では約5割である。

関西起源の「めっちゃ」も使用者率が一定程度あり、岡山市では約4割、福山市では約7割となっている。福山市のこの数値は先の「すげー」と並ぶ。この「めっちゃ」は、現在日本各地で急速に普及し全国区化しつつある。たとえば関西から遠く離れた北海道の各地でも、多人数調査の結果そうであることが確認されている（朝日祥之・尾崎喜光2017）。

「めっちゃ」の元の形である「めちゃくちゃ」も一定の数値がある。特に福山市では約

5割が用いている。さらに、「めちゃくちゃ」のバリエーションである「むちゃくちゃ」や、その省略形である「むっちゃ」も、数値はそれほど高くないものの一定の勢力を持っている。

今では若干古いニュアンスを伴う「ちょー」や、西日本で広く用いられていると考えられる「ほんま」も一定の勢力を持っている。両市とも程度副詞の表現はじつに多彩であることもわかる。

図3-3は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。なお、「ぶち」「ばり」「ぼれー」は福山市でのみ調査しているので注意されたい。

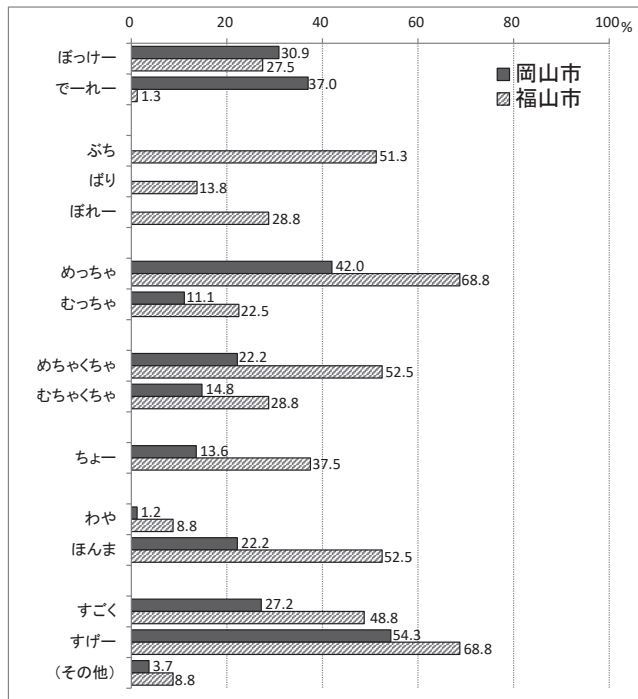


図3-3 程度副詞（岡山市と福山市の比較）

岡山市と福山市との数値の開きの大きさという観点から改めて見てみよう。

「ぼっけー」の使用は両市に共通しているが、「でーれー」は岡山市での表現であることが改めて確認される。

「めっちゃ」以下の表現については、いずれも福山市での数値がかなり高い。さまざまな表現において福山市の数値が岡山市よりも高くなるという傾向は、動詞打消し、打消し過去、アスペクトを分析した尾崎喜光（2020）でも確認された。いずれかの数値が高ければ他の表現の数値は低くなるというのが一般的だと思われるがそうっていないのは、調査員が複数回答をどれだけ積極的に求めたかということに起因するのかもしれない。もしそうだとすれば、「ぼっけー」以外は両市で根本的に異なることはなさそうである。

図3-4-a～図3-5-cは、岡山市・福山市の結果を属性別（男女別・年齢層別）に分析したものである。数値の大きな違いの有無という点から結果を見ていく。

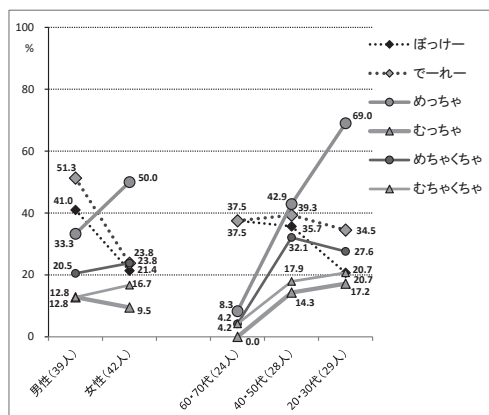


図 3-4-a 程度副詞 (岡山市)

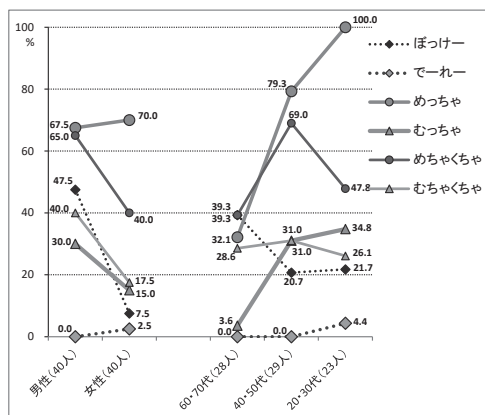


図 3-5-a 程度副詞 (福山市)

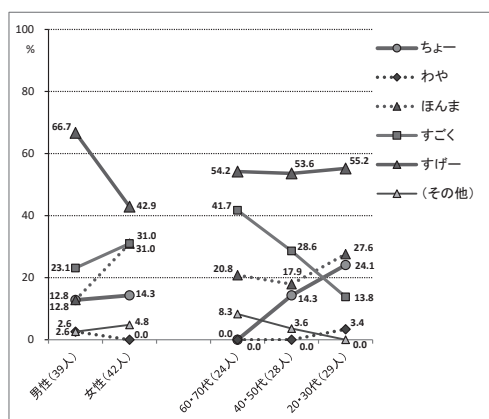


図 3-4-b 程度副詞 (岡山市)

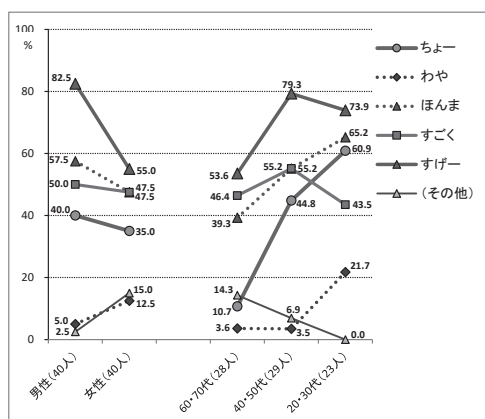


図 3-5-b 程度副詞 (福山市)

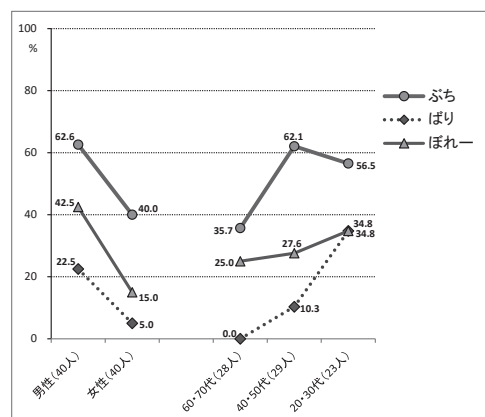


図 3-5-c 程度副詞 (福山市)

男女別に見ると、「ぼっけー」は両市共通して女性よりも男性の使用者率の方が高く、現在は主として男性が用いる表現となっている。岡山市の「でーれー」や、福山市でのみ調査した「ぶち」「ぼれー」「ばり」にも同様の傾向が見られる。

関西起源の「めっちゃ」は、福山市では男女差は特に見られないが、岡山市では男性よりも女性の使用者率が高い。また、低文体での共通語の「すげー」は、両市とも女性よりも男性の使用者率が高い。連母音の融合形に感じられるぞんざいさがこの違いの要因となっているものと考えられる。

年齢層別に見ると、「めっちゃ」の年齢層による違いが著しい。両市とも、若年層になるに従い使用者率が一貫して大幅に上昇する。とりわけ福山市の20・30代では回答者全員が用いる表現にまで至っている。岡山市の20・30代の使用者率も7割と高い。現在両市でこの表現が急速に普及していることを表しているものと考えられる。北海道の各地でも、これと同様の年齢層による顕著な違いが認められ（朝日祥之・尾崎喜光 2017）、急速な普及は全国各地に見られるようである。「めっちゃ」のバリエーションである「むっちゃ」等にも、数値は相対的に低いながら同様の傾向が認められる。

「ちょー」にも同様の傾向が認められる。とりわけ福山市では若年層に向けての増加が急激である。これに対しやはり共通語形の「すげー」「すごく」は、岡山市の「すごく」が若年層に向け数値が下がる傾向にあることを除き、ある程度高い水準にとどまったままであり、一貫した数値の大きな増減はない。他の表現との併用という形で、若年層の間でも使われ続けている。

方言形の「ぼっけー」および岡山市でのみ用いられる「でーれー」についても年齢層による顕著な違いは認められず、一定程度の使用者率が若年層においても維持されている。これらの方言形は、「めっちゃ」等の急速な普及を受けて著しく衰退に向かっているというわけではなく、若年層においても併用という形で一定程度用いられている。

福山市でのみ調査した方言形については、「ぶち」「ほれー」は若年層においても一定程度数値が維持されているのに対し（ただし「ぶち」は60・70代から40・50代に向けて増加が見られる）、「ばり」は若年層においてもそれほど高い使用者率には至っていないものの、高年層から若年層に向けての一貫した数値の上昇が認められる。新しい方言形として普及しつつあるものと考えられる。

4. まとめと今後の課題

以上、筆者が最近実施した岡山市と福山市における多人数調査の結果から、“濃い”方言およびそれと関連する表現の使用状況を見てきた。

得られたおもな知見をまとめると次のとおりである。

(1) 「～じゃが」

「雨じゃが」の使用者率は岡山市も福山市もおおよそ5割であり、使用者率という点から言うとき必ずしも代表的な方言というわけではない。使わない人も半数いる。

「雨じゃが」に相当する共通語形「雨じゃん」の使用者率は福山市で6割にのぼり、福山市で最もよく使われる表現となっている。性別では女性で、年齢層別では中・若年層で使用者率が高い（40・50代では8割ほどが使用）。東京などの「じゃん」を使っているという意識がないことや、JR西日本のチラシのコピーで他の方言形と同一の文で用いられていることからすると、この「じゃん」は首都圏などの「じゃん」が広まったものというよりも、広島県の方言としての「じゃん」である可能性が高いと考えられる。

関西形の「雨やん」の使用者率は両市で2割前後とそれほど高くない。

(2)「～けん／けー」(理由を表す助詞)

使用者率が最も高い表現は、岡山市では共通語形の「から」、福山市では方言形「けー」である。使用者率という点から言うと、岡山市での「けー」「けん」は必ずしも代表的な方言というわけではない。なお、両市の傾向の違いは、GAJにおいて岡山県は「ケー」と「カラ」の併用が、広島県では「ケー」が優勢という地理的傾向の異なりが、現在の数値的異なりとしても表れているものと考えられる。

「けー」と「けん」の関係を見ると、両市とも「けー」の方が優勢である。

男女別に見ると、岡山市では「けー」は男性で、「から」は女性で使用者率が高い。

年齢層別に見ると、岡山市では「けん」「けー」は若年層になるに従い使用者率が高くなるのに対し、「から」は逆の傾向を示す。

(3)「ぼっけー」「でーれー」(程度副詞)

「ぼっけー」の使用者率は両市とも3割程度にとどまり、使用者率という点から言うと、現在では代表的な方言とは言い難い。「でーれー」は福山市での使用はほとんど見られず、岡山市でのみ用いられている。ただし岡山市での使用者率は4割程度にとどまり、これも代表的な方言とまでは言い難い。

福山市でのみ選択肢として追加した方言的表現の使用者率は、「ぶち」が約5割、「ばり」が1割強、「ぼれー」が約3割である。最も有力な方言形は「ぶち」である。

両市においてこうした方言形以上に優勢なのは、関西起源の「めっちゃ」と、共通語の崩れた形である「すげー」である。「すげー」は両市において最もよく用いられる表現となっている。「めっちゃ」も使用者率が一定程度あり、岡山市では約4割、福山市では約7割である。

男女別に見ると、「ぼっけー」は両市とも女性よりも男性の使用者率の方が高く、現在では主として男性が用いる表現となっている。岡山市の「でーれー」、福山市の「ぶち」「ぼれー」「ばり」にも同様の傾向が見られる。

関西起源の「めっちゃ」は、岡山市では男性よりも女性の使用者率が高い。共通語の「すげー」は、連母音の融合形に感じられるぞんざいさゆえか、使用者率は両市とも女性よりも男性で高い。

年齢層別に見ると、両市とも「めっちゃ」は若年層になるに従い使用者率が一貫して大幅に上昇する。とりわけ福山市の20・30代での使用者率の高さは著しい。現在急速に普及していることを表しているものと考えられる。同様の傾向は「ちょー」にも認められる。

方言形の「ぼっけー」および岡山市でのみ用いられる「でーれー」については年齢層による顕著な違いは認められず、一定程度の使用者率が若年層においても維持されている。

福山市でのみ調査した方言形のうち「ぶち」「ぼれー」は、若年層でも一定程度の数値が維持されている。これに対し「ばり」は、若年層でもそれほど高い使用者率には至っていないが、高年層から若年層に向けての一貫した数値の上昇が認められる。新しい方言形として普及しつつあるものと考えられる。

当該地域の代表的な方言と言われながら、使用者率という点から見ると、現在では必ずしも代表的とはいえない表現が少なからずあることについて、岡山市と福山市のケースを見た。実際には、失われつつある伝統的で“濃い”方言に対するノスタルジーや当該地域への所属意識のシンボルという意味も含めて“代表的”と意識されているのかもしれない。

本研究では岡山市・福山市のみを調査対象としたが、本稿で明らかになった状況は、これらの周辺地域でもおそらく見られるに違いない。「雨じゃが」との関連で福山市での使用者率が非常に高いことが確認された「雨じゃん」は、東京などの「雨じゃん」ではなく当地の方言としての表現であると考えられるならば、福山市と岡山市の間で使用者率がグラデーション的に移行するのかなども解明すべき課題である。中国地方南部の備前・備中・備後全体を対象とする多人数調査、あるいは美作地方を含む岡山県全域を対象とする多人数調査に研究を拡大することで、広域地域におけるこうした状況を把握することは、現在の方言研究として意義があろう。

注

- 1 岡山市調査は下記の①の学内研究助成金を受けて、福山市調査は②③の学内研究助成金を受けて実施した。研究代表者はいずれも筆者である。なお、福山市調査は灰谷謙二氏(尾道市立大学)との共同研究である。

- ①「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」(2013年度)
- ②「広島県福山市民の言語使用と言語意識に関する多人数調査」(2018年度)
- ③「広島県福山市民の言語使用と言語意識に関する多人数調査(追加調査)」(2019年度)

参考文献

- 朝日祥之・尾崎喜光(2017)「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その5」『北海道方言研究会会報』93
- 大西拓一郎編(2016)『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』(朝倉書店)
- 尾崎喜光(2014)「岡山における連母音の融合状況(2)－「岡山市民調査」から見る－」『清心語文』16
- (2015)「全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』39-1
- (2017)「岡山市における話し言葉の男女差」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』41-1
- (2020)「岡山市・福山市における方言使用に関する社会言語学的研究－動詞打消し、打消し過去、アスペクト－」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』44-1
- 国立国語研究所編(1989)『方言文法全国地図 第1集』(大蔵省印刷局)
- 編(2003)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第15巻 広島・山口』(国書刊行会)
- 灰谷謙二監修(2016)『これが広島弁じゃ!』(洋泉社)
- 平山輝男編者代表・神鳥武彦広島県著者(1998)『日本のことばシリーズ 34 広島県のことば』(明治書院)
- *参照した「IV 方言基礎語彙」の執筆は神部宏泰氏
- 町博光(2019)「広島市方言の接続助詞「ケー／ケン」と「カラ」」『国語国文論集』49